新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

村高

題字　宮　絢子

2006.5.15　第17号
発行人　本間勝治
編集人　大滝　修
事務局
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎ 044(953)8368

関東の村高衆　来いっしゃ！

2006 関東支部 同窓のつどい ご案内

五月、ふるさとの月遅れの節句のちまきはまだですが関東は鯉のぼりもしまわれビルの小さな公園もすっかり新緑に覆われています。

新緑に続く六月は梅雨とともに村高関東支部同窓のつどいの行われる季節です。

小さい頃「サザエさん」の漫画を見てどうして梅雨にはカビが生えるのだろうと不思議に思っていました。村上の梅雨は寒く雨は降っても蒸し暑くは無くカビなどは生えなかったですね。関東に来て梅雨のカビてこんなふうなんだと知りました。

話が横道にそれてしまいましたが、ふるさとを離れ、この関東にしっかりと根付いている方、夢と希望を持って母校を巣立ち、大学に会社にこの地に新しくやってきた方、村高に籍を置いた方、そして我らの同期新制十九回生（昭和四二年度卒）の皆さん、紫陽花の色の深まる頃、花の東京のど真ん中四ッ谷駅まで足を伸ばしてみませんか！

「ふるさとの　なまりと人の　なつかしき　笑顔の語り　心安らぎ」会場では久しぶりの再会が有ったり、知らぬと思っていた人が兄弟の同級生だったり、ご近所の方だったり新しい出会いが有るかも知れません。

ぜひお仲間を「いっしょにあべてば！」とお誘いの上で、ご参加下さるようご案内申し上げます。

会　長　本間勝治
実行委員長　山下治郎
新制十九回　実行委員一同

○とき
平成十八年六月十七日（土）
受付開始　正午より・一時開会
○ところ
スクワール麹町
千代田区麹町六―六
電話〇三（三二三四）八七三九
JR（中央線・総武線）
四谷駅前（麹町口）
地下鉄（丸の内線・南北線）
四谷駅
○会費
・男女とも　八千円
・平成十四年～十七年卒　四千円
・新卒者　無料
※会場準備の都合上、五月三十一日(水)迄に出欠のご返事をお願い致します。

同窓の集い実行委員会から

平成17年9月25日に19期生40人が高校卒業後初めての関東地区の同期会に参集し、旧交を温めました。年齢相応に身体的な変化はそれぞれ見られましたが、ちょっと会話をはじめたら、すぐに40年前の青春時代にタイムスリップ。本当に楽しい一日でした。

2月19日に開催した同期会の新年会には18名の同期が参加しました。

さて本年度の関東支部総会では、アトラクションとして、村高音楽部卒業生10数名が混声四部合唱を披露します。ここ10年以上に亘り、毎年全国各地から集まり、1泊2日の合宿をし、卒業後に覚えた合唱曲にもチャレンジしています。

今回も関東地区在住者のみならず新潟県内などから参加してくれる人もいると思います。

またアトラクションでは「歌声喫茶」風に青春歌謡大特集として、懐かしの青春歌謡をピアノに合わせて会場の皆さんと一緒に歌うコーナーもあります。

「高校三年生」「学生時代」「青い山脈」など、思いっきり歌いましょう。

皆様のお越しをお待ちしています。

（新19回生）安富成良

同期会だより

新制15回生 第四回同期会を11月に開催

我々新制15回生（昭和38年卒業）の関東地区同期会が始まったのは今から4年ほど前であった。

始まったきっかけは、村高の関東支部同窓会総会の幹事を新制15回生で行うこととなり、関東支部同窓会の世話役である同期の尾崎君が関東地区在住の新制15回生に声をかけたのが始まりである。

村高の関東支部同窓会総会を我々新制15回生の幹事で何とか無事終了後、同じ会場の別室で同期会を開いたのが第1回目である。その場で毎年開こうということになり以後3回開催している。

我々15回生は7クラスで同期がざっと350名いたと思うが、そのうち105名ほどが、関東地区に在住している。そんなにいるのかと改めて驚くが、考えてみれば、当時村上地区にさしたる産業もない一方、関東地区では高度成長の黎明期にあり、東京一極集中が始まる頃に卒業したということであろうか。

出席者の男女比は6・4くらいである。幹事はクラス順となっており、今年は我々6組が幹事を行う。

これまでの例では11月の土曜日の午後にホテルの宴会場を借り、8千円の立食パーティー形式で行っている。やはりそれだけでは名残りが尽きず、二次会にくりだすことが多い。二次会といっても居酒屋で2時間ぐらいわいわいがやがやするのである。（会費はその場で徴収。）

我々新制15回生も一昨年還暦を超えて懐旧の念募る歳になり、小生などは愉しみでしょうがないのであるが、ここ3回の出席者は30名ほどでメンバーが固定してしまい、出席率が低いのが残念である。一度出席すればその楽しさが実感できるので、次回もまた出ようということになるのだが、初回に引っ張り出すのが難しい。聞くところによれば新制13回生は同期生通信なるものを発行して親睦と連帯を深めているようだが、そこまでやるのは大変なので、同期会の様子をデジカメに撮って如何にノスタルジックで楽しいものかを案内状に載せてPRするのも一案かも知れない。

パーティーでは一人ひとりからの近況報告を聞くのがメインイベントになっており、それはそれで結構楽しいのであるが、より面白くする手立てはないものかと悩んでいる最中である。

例えば、我々の同期には次期BSNの社長と擬されるH君、有名建築家で本も書いているT君、超有名プロボーラーと結婚したO君、上場会社の子会社社長のI君など多士済々なので、こうした人の卓話を聞くとか、村高先輩にゲストスピーカーをお願いする等を企画したらどうかなど、勝手に考えている。

いずれにしても今年は関東地区在住の同期でまだ出席したことが無い人に一回は出て貰う名案はないか、我々幹事6組で話し合いたいと考えているところである。

青山光夫　連絡先
・Mail：nmssaoyama@yahoo.co.jp
・電話：045―893―9693

2005のつどいから

思い出エッセー　あの日　あのころ　いまじぶん

ライバルと信頼

小川景士（旧制40回卒）

われわれが中学校を受験したのは、昭和13年（1938）年3月であった。生涯に一度の難関で、八人兄弟の四男である僕のために、父親が付き添ってくれた。半日待っている間に、僕の父と朝日村早稲田の富樫利男君のお母さんと、半日駄弁ってすっかり親しくなったと喜んでいた。

入学したら若い飯塚正雄先生が体操の担任で、一年生のバスケット部に入ったら、五年生のチームに勝っちゃったものだから、喜んでランニングを買ってくれるやら、えらいもてたものだった。この先生は県大会の応援歌の練習の時に、泣いて励ましてくれた感激恩師だったことが印象深い。

同窓生にたしか村上本町の出身で、鶴見正夫君が居た。鶴見君は早稲田大学法学部を経て、児童文学作家・童謡作家になった。僕は東大法学部を経て、弁護士になったが、鶴見正夫の名は朝日新聞の新人国記の出る都度、書き立てられてもてはやされた。

鶴見君は、僕をホームロイヤーと見立ててくれたのか、著作が出来るたびに署名捺印して寄贈してくれた。贈られた著作を見ると別表のとおりで、青少年の志気を掻きたてるものであった。

昭和52年に僕が弁護士会の副会長をやった時に、東京駅前の日本工業倶楽部で平野毅・小日向毅夫両先生夫妻を迎えて、全国から会員を集めて同期会をやった。名づけて「村中四〇会」（むらじゅうよれえ）とした。なかなかの盛会で、みんな二次会カラオケへ行こうと言いだした。

僕はみんな日帰りをしてくれるものとばかり思っていたものだから、とっさに神田の駅の屋上にある旧35回生の先輩・斉藤善英さんを尋ねようとなった。たまたま僕は斉藤さんの店へ夜中に連れて行かれただけで、位置が判らなかった。たまたま鶴見君と同じ車で神田駅までは行ったのだが、斉藤さんの店を見失い、迷子になってしまった。カラオケなら銀座へ行けばよかったと後悔しながら散会した。

そのうち、いちはやく故郷に錦を飾った鶴見君にも、虚点はあった。超ヘビースモーカーで、50歳ぐらいで、肺癌で病死してしまった。そのころ東京では、サントリーホールで鶴見正夫童謡演奏会が催されて、それは、それは盛会を極めた。

その後、平成14年4月、杉並区セシオンで、杉並を中心とした青少年による鶴見正夫反戦歌「イン・テラ・パックス」合唱大会が開かれた、鶴見正夫夫人・愛子さんも招いていっしょに聴いた。男女青少年合唱隊約五〇名、聴衆は二～三千名だった。写真が残っている。鶴見夫人・愛子さんには、一男一女のお子様がおり、「村中四〇会」のたびに愛子さんは出席して下さった。そして、信州上田あたりでも鶴見正夫演奏会が開かれていると話してくれた。

それから富樫利男君は陸士から航空機に乗って、終戦時にロシアのエラブガへ3年ほど抑留され、帰ったら囲碁が五段の実力になっていた。帰国後、東大工学部へ入学して、中部電力に入り、核開発をして、目下ユニテックコンサルタント㈱を経営している。その後、エラブガの戦友墓地参拝団長として三度もかよった。

もう一人、岩船郡朝日村布部で農業を営む佐藤又吉君は、黙々とやっていたが、昭和52年春あたりに、農水産大臣賞を受けた。

いずれもライバルとして努力して、しかも信頼しあっている同期生である。

鶴見正夫　著作集

書名	出版社
鮭のくる川	国土社
あめふりくまのこ	〃
雨のうた	〃
最後のサムライ	〃
鶴見正夫童話集	カワイ出版
インテラパックス（反戦歌）	
しなの川	PHP研究所
ふしぎな音をおいかけて	童心社
伊藤博文	講談社
松尾芭蕉	〃
小林一茶	〃
ぼくの良寛さん	理論社

「春は名のみの・・・・」

鶴橋康夫（新制10回卒）

「人生、瞬きする間のことである。単純なことを、複雑にするな」が、父の教えだった。そうなのだが、僕にも、家族もいれば友達もいる。まして、監督稼業、そう簡単には、生きられない。

ファックシーンだらけの、渡辺淳一原作「愛の流刑地」を撮ろうとしている。

「性的犯罪」「魔性」「性的黙示録」と、かなり過激なセックス描写をしてきたが、今度は、ベッドで、「首を絞めて」と女に言われ、本当に殺してしまった男の裁判劇である。過失か、嘱託か、殺人か、男と女の性の営みがテーマである。

芸術選奨の大賞を戴いたばかりである。

「それはないわよ」と、妹は、絶縁宣言をする。

成人映画、R指定だといわれ、何度も台本を書き直した。作品を作り出すのは、至上の喜びなのだが、腰痛持ちに花眼では、身体に堪える。

出演交渉も難航している。裸のオンパレードに、旬の役者は、はなから尻込みする。

その間に、京都、八尾、芦ノ湖にロケハンに行った。

「春は名のみの風の寒さや」、である。

太陽の軌跡からいえば、斜陽の季節を迎えた。

老いとの戦いには必ず敗れる。しかし、人間は重力に逆らうことで地上に立っている。飛べない人間が跳ぼうとし、魚でない人間が海底に挑むことで文明が生まれた。ならば、老いを迎え撃つことで、真の成熟を追い求めるしかない。

励みは、若い頃の友達である。

去年、同窓会の講師で母校に呼ばれた。

前の日、大滝雄志と朝日村に大須戸能保存会の人たちを訪ねた。山八割、平地二割のわが国には、天を仰ぎ、地に伏して収穫を願った「祈り」の文化がある。有意義な一夕だった。

その日、同窓生が母校に駆けつけてくれた。

晃さん、直ちゃん、興平、時田、征支に哲、鉄ちゃんに小川さん、貞枝さんに清さん・・・・。

輝くような人生の軌跡をその顔に浮かべていた。

「僕は、このまま生きていいのか？」

聞くまでもなく、彼らの顔が、「お前は、思った通り、好きに生きていいんだよ」と、いっていた。

今秋、「愛の流刑地」が、東宝で上映されるか、延期になるか、今、胸突き八丁にいる。結果はともかく、同級生の笑顔に後押しされながら、分相応に頑張ってみようと思う。

窓に、蝶々雲が北に向かって、ゆっくりと流れている。水ぬるみ、ホトケノザの紫も咲いた。

同窓生諸氏のご健康を祈るや切なり、である。

「村高」応援団長の半生

菅井初雄（新制19回卒）

団長は、昭和24年、鰯漁などで賑わっていた集落である家の長男として生まれた。母は、弟を死産し、その後、妹を生んだが産後の肥立ちが悪く、妹と共にこの世を去った。小学1年生の、雪が深々と降り続いた日の事であった。そして祖母に育てられた。

中学3年生の時は、担任の先生から生徒会役員を薦められ、これを引き受けた。

昭和39年4月、「村高」に入学した。団塊の世代で、同期は11クラスもあり、全校生徒約1200名のマンモス高校となっていた。

高校2年生の時、廃部だった応援団部を先輩らと復活させ、その年の秋には、団長に推薦された。

同部は、慶応大学応援団部の実践指導を受けて、力をつけながら、壮行会などの纏め役を担った。

3年生のある夜半、同輩宅から戻って床に着いた直後、「火事だ！」という女性の悲鳴に飛び起きた。

火元住人を助け出さなければの一心で、現場へ駆けつけた。強風で火の粉飛び散る中、懸命な消火活動の末、2軒全焼したが、人畜に被害はなかった。

新潟県警から刑事らが来て現場検証、団長も参考人聴取を受けた。真相の究明に取り組む刑事らの姿に感動し、刑事になりたいとの衝動に駆られた。

その年の秋、新潟県警から受験通知が届いたが、気の強い祖母の猛反対にあい、この時は諦めざるを得なかった。

昭和42年3月、卒業生を先生達が校門で見送りする場面が、地方紙にアップで掲載された。関校長先生と笑顔で握手をしている団長の写真と記事を目にして、応援団部での想い出が走馬灯の如く浮かび、やり抜いた生き甲斐を改めて実感し、更には、集団を纏めて苦難に耐える自信をも培っていた。

その後、縁故で東証一部上場の船会社に入社し、アフリカ航路を皮切りに7つの海を渡り歩き、大時

化の中を生き抜いた。23歳の時に恋愛結婚し、長男を授かったが半年間会えない定め、転職を考えた。

そして、帰国後、高校時代捨て切れなかった刑事職を天職と決め、警察官採用試験に応募した。

24歳にして、神奈川県警の3次試験に合格、昭和49年7月から警察学校で文武両道の厳しき缶詰教育を受けたが、中には挫折する者も多く居た。

ここでは「村高」応援団長の経験を生かし、全校生徒約500人を纏める学生隊長を務め上げた。

そして、昭和50年7月、横浜市の警察署に着任し、交番やパトカー勤務を1年やった後、異例のスピードで同署の刑事課知能犯係に配属された。

この係は、警察学校で全く勉強していない汚職・背任・詐欺・横領・選挙違反などを内偵検挙する部門であり、当初は戸惑ったが、幸い年配ベテランで新潟県出身の係長がおり、良き指導を受ける事ができ、3年にして、漸く、半人前の刑事になれた。

その後3年間、同署で経験を積み汚職事件を多く経験し、諸々の捜査手法を会得することができた。

異動して2年間は署の知能犯係、本部捜査二課員になって5年間、その後、署の知能犯係係長を2年間、再度、本部捜査二課に戻って7年間過ごし、通算23年間を知能犯捜査に携わり、職人刑事になれた。

平成11年からは、本部刑事部に所属して、身内警察官の犯罪処理などを担当し、警察歴通算32年間になって、あと残すところ3年となった。

今では、後継者育成にも力を注いでいる。

人生には色々と紆余曲折があるが、高校時代のクラブ活動も人生を左右する一因だと思う。

若き日の汗と涙、人との出会いが、実像の自分を見つけ出す活力となる。後輩諸君が己の天職を見いだす一助になればと団長（筆者）はエールを送りたい。好きでなければ続けられないが、デカ人生も悪くはないとつくづく感じる昨今である。

電波部の仲間たち

丹田安夫（新制30回卒）

兄の影響を受け、中学校一年でハム（アマチュア無線）の免許を取った。

中学校時代は無線漬け。ろくに受験勉強もしないで村高に滑り込んだ。

無線が趣味だけに体力もなく、運動クラブとは全く無縁。電波部に入った。

部長さんは、塩谷の中島先輩である。

ハムの初心者は、マイクに向かって言葉を話す「無線電話」が主流であったが、中島先輩はキー（電鍵）を使ってトン、ツーとモールス信号で通信をする。なんだか判らないが、初心者とはかなり違う。とてもかっこ良い。細身で、笑福亭鶴光とスヌーピー似。がらがら声が特徴。無線電話向けの声では無かったのでしょうか。

山辺里の小田先輩は、僕の始めてのハム相手である。買ってもらった無線機をいじっていたところ、いきなり応答してきた。

七三年十月の夜であった。

安良町の山貝先輩は、当時卒業されていたが、妹の久美子さんが一年先輩。

同じ電波部で何度かご自宅にお邪魔した。

久美子先輩は、お元気でしょうか。

女性のハムは、当時も珍しく、久美子先輩の外に山口先輩、菅井先輩が、電波部に所属し、花を添えていた。

朝日の田巻先輩は、演歌の宮路おさむさん似で、話がとても面白い。

同級生の河内君は、僕と違う。天才肌で、やたら頭がいい。勉強では歯が立たなかったが、ハムでは何とか勝っていた（か、どうだか）。

毎年四月にハムのコンテストが開催される。

校舎の屋上全部を使って、アンテナ線を張り巡らす。一日がかりで作業を終え、いざコンテストの開始。

メンバー全員がシフトを組んで、マイクに向かう。教室の回転椅子を簡易ベッドとし、仮眠を取る仲間。カップラーメンで空腹を満たし、またマイクに向かう。

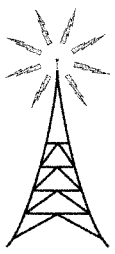
スピーカーから流れ出る混信の中から、自局の呼び出しに応答する声を聞き取る。

騒音。

また混信。

丸一日ろくに仮眠もせず、怒鳴りまくり、コンテストは終了する。

入賞はできなくても、メンバーがひとつになる瞬間であった。



「英語」

本間恵美子（新制31回卒）

ここ数年海外旅行をする機会が増えたことで、英語を話したり書いたりする機会も増え、英語力の必要性を感じています。

三年前、義母と一緒にオワフ島に住む義姉夫婦を訪ねた時のことです。最初の一週間を義母たちと過ごし、後半の一週間は、一人でハワイ島を廻った後、ワイキキのホテルで過ごしました。

無事ハワイ島からホノルル空港に戻ってきた私は、リムジンバスに乗りホテルへ向かいました。バスを降り、数メートル歩いて気が付きました。「バッグがない・・・」。バスが遠くの方に小さく見えました。人生で最高に青ざめた瞬間でした。

バッグの中には、パスポート、帰りの航空券、現金、そして正にこの時に必要な、状況別英会話本が入っていたのでした。

とりあえずチェックインをしようと思いフロントへ行きました。フロントの女性に、私から何を言ったのかは覚えていないのですが、返ってきた言葉は「ここには日本語の解るスタッフはいません。英語か韓国語なら通じます」でした。（後で知ったのですが大韓航空が経営するホテルとのこと）。

うまく話せないから恥ずかしいなどと言ってはいられませんでした。自分の名前を告げると、2才児程度の英語で一方的にしゃべりだしました。

「私は予約しています。今日から3日間。（ポケットからバスの半券を出し）何時何分に発車しました。今バスを降りました。バッグを忘れました。バッグの中には、パスポート、チケット、お金、クレジットカードが入っています」と。文法はめちゃくちゃ、発音はカタカナ英語。それでも通じたようです。

質問が返ってきました。

「座席の場所はどこですか？」

「（一番後ろなんだけど・・・）バック・・・」

「どんな種類のバッグですか？ショルダー？ハンドバッグ？」

「ショルダー」

「革ですか布ですか？」

「クロス」

「色は？」

「（くすんだ薄い緑色なんだけど、単語がわからない。履いていたジーンズの色と似ていたので指差しながら）ジィス　カラー」

「ホテルの予約は誰がしましたか？」

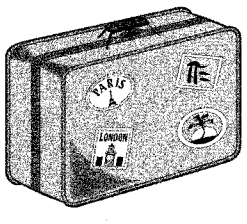
「マイ　ブラザァ　イン　ロウ」

女性はパソコンで私の予約を確認するとすぐ、バス会社へ連絡を入れてくれました。

さっきの運転手さんがバッグを届けてくれるから少し待つようにとのことでした。程なく運転手さんがやって来てバッグを受け取ることができました。チェックインを済ませ、その場を離れるとき、私の口から出た言葉は「サンキュウ」だけでした。

本当は「助けてくれてありがとう。感謝しています。」と言いたかったのです。

手元に戻ってきた会話本を調べて、このフレーズを探せばよかったのです。きちんとお礼を言うことができなくて恥ずかしい思いをしました。



村高時代を振り返って感じること

平田　丞（新制36回卒）

3月に入り、雪解けが始まったかと思うと急速に暖かくなってきた。関川村が春を迎えつつある穏やかな日に、3歳年上で4月から大学に進学する兄といろいろと話をしていた。話が勉強のことに及んだとき、将来大学に進学したいならばとにかく高校の三年間は勉強しないといけない、と聞いた。そのとき、関谷中学校を卒業し、兄と入れ替わりに村高に入学することになっていた私は、高校生活は大変になりそうだと感じた。

当時、朝は6時半過ぎに起床。自転車で大腿の筋肉がはちきれるくらいのスピードで越後下関駅へ向かう。7時過ぎの坂町行きの汽車（米坂線）に乗り、坂町で乗り換えて村上で下車（羽越線）する。

羽越線の列車には高校生や通勤の社会人が多く乗っていてかなり混んでいた。家を出てから約1時間

強で村高に到着した。村高に通う生徒は、新潟県の北の広い範囲からの人たちだった。いろいろな地域からの多くの友人ができた。各科の印象に残る先生方が、授業で熱がこもると、より進んだ内容を教えて下さった。それらの内容の中には今でも思い出すものもある。勉強を深めていくと、どんどん楽しみが広がることを教えていただいた。

平日は一日6時限で、部活をしていなかったので下校がだいたい3時半頃だった。

帰りの汽車では読書などをして過ごした。帰宅後は、兄の話にもあったように時間さえあれば勉強をした。

高校時代の勉強は、主に、世の中では既に判っているが自分が知らない内容（教科書や参考書）を躍起になって吸収する勉強だった。

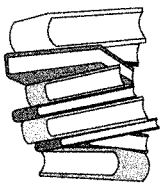
そんな自分に、小さなきっかけで新しい変化が生まれた。ある晩秋の日、帰宅の途中にふと汽車の窓から眺めた関川村の山々の紅葉に感動したことがあった。その感動は、自然の姿がこれほどまでに美しいという驚きでもあったし、自然自体が「美しいでしょう?」と語りかけてきてくれているような感じがしてならず、とても不思議で新鮮なものだった。

勿論、自然が話しかけるはずはないのだけれども、じっくり見つめた結果そう感じられたのだった。

事象を自分の目で見て感じ取る、考えるという（しかも答えが決まっていないもの）、本で学ぶのとは違うやり方をある程度はっきりと意識したのは、このときだったと思われる。

村高を卒業後も、私は、自分から進んで外に、外に新しい知識・学識を求めて進学し、大学では飽き足らず生命科学における更なる真理を求めて大学院にまでも行った。既知の事柄を踏まえるものの決して妄信しないで、自らの実験により得られた結果を論理的に構築していく研究生活には、まさに、他人の論文を読むだけでなく、自分の目で見て考え、思考を発展させていく姿勢が必須だった。ふと思うと、以来、臨床医として仕事をしている現在まで同様なスタイルでやっているように思う。

高校時代にこのようなスタイルを育んでくれた環境に感謝している。



同期会雑感

齋藤小夜子（新制19回卒）

昨年の9月に19回生関東地区在住者の同期会が卒業以来、初めて開催され、18歳の時から39年振りとなった再会は、興奮と歓声のどよめきでしばしおさまらず、顔を紅潮させながら各テーブルで笑顔とおしゃべりが飛び交いました。それはものの見事に年月は経ていても、青春真っ只中の多感な時期を一緒に過ごした仲間であれば、気持ちはそのまま39年前にタイムスリップしてしまいました。

私達19回生は、団塊世代の真ん中に有り、生まれた時から、いつも「その他大勢」という中で揉まれ、競争にさらされてきました。

村高では11組まであり、今の少子化からは想像もできないことですが、1クラスに49名もギュウギュウに押し込まれ、最後列の席の人は壁板にくっついていました。あんな大勢だったにも拘らず、連帯意識は強く、なんか行事等が起きると良く纏まっていたことが皆の口から出ていました。

その最たるものが、運動会のクラス対抗応援や競技・球技大会であり、私達女性には、なんと言っても「創作ダンス」でした。

クラスによっては、その時のメロディーを口ずさみ、「こんな踊りだったよねぇー」と踊りだす光景も見られ、39年経った今でも覚えているのですから、なんとすばらしいことでしょう。

その当時の出来事としては「新潟地震」や「東京オリンピック」があり、卒業した夏には「8・28水害」に襲われて大被害も出ましたが、それらの話題で騒然となりました。奇しくも、まためぐり巡って、新潟はここ数年に「中越地震」や「水害」、命名までされた「大雪害」と災害が続き、そして今年「トリノオリンピック」があって、振るわなかったのは、自国と外国の違いや社会背景も有るのでしょうか。

とかく私達団塊世代は、一括りにされてきましたが、これからの定年後の動向についても、経済効果や地域の活性化・職場の技術後継の問題、更には、団塊ジュニアである子供達のことに至るまで、新聞等で様々に取り沙汰されています。

私達は、生まれてからずっと当たり前のこととして一生懸命に働いて生きてきたことを、批判や論評されるなど、「ちょっと割りに合わないよなぁー」とぼやきたくもなりますが、人数の多いことで世の中を動かしてきたことは間違いないし、まぁ仕方ないことでしょうか。

しっかり生き抜いてきた自信と、このたくましさだけは、一朝一夕では出来ないことですし、これからも、我ら村高19回生は、それぞれに図太く、しぶとく人生を楽しみながら生きていきましょう!

39年振りの同期会を企画してくれた発起人兼世話役の安富さんや長坂さんに感謝!感謝です。

心が浮き立ち、また元気になりました。（最も、34年間、毎日同期会のように、日々元気を貰ってきた相棒もいますが）

今年の2月には、総会の打ち合わせを兼ねての同期新年会もありましたが、これからが、関東支部19回生・第二の青春、スタート!かな?

偶然ということ

須貝研司（新制23回卒）

村高を昭和46年に卒業して、現在、小児神経科医として、てんかん、精神運動発達遅滞、自閉症、学習障害、筋疾患などに関わっている。小児科は初めから好きで選んだが、神経はやりたくないと思って神経を選び、てんかんはやりたくないと言っててんかんを専門にし、重症心身障害医療は好まないと思って重症心身障害医療をやっている。天職と思って楽しくやっている。これには偶然の要素も大きい。

もともとは医師になるなんて考えもしなかった。家業は林業で、幼い頃から父や祖父について山に入り、高校2年までは大学に行って燃えない木を作りたいなどと漠然と考えていた。しかし、多感な年頃にもれず、偶然に読んだ岩波新書に影響され、高校3年には医師になりたいと思うようになった。

医学部卒業時には子供が好きなので小児科を選び、よい研修を求めて神奈川県立こども医療センターを選んだ。小児科は楽しかったが、重い神経疾患の患者は言葉のやりとりもできず、最初は神経はやりたくないと思った。また小児神経科で研修していた3か月間は最も厳しく、朝7時半に病棟に行き、翌朝3～4時に寮に帰った。ただ、たくさんの困難な神経疾患を経験させていただき、患者と家族の困難や喜びも経験した。

初期研修の後に専門研修を選ぶ段になり、小児科全部を生かせ、社会との結びつきが最も強いことと、一番大変な思いをしたことから神経を選んだ。しかし、決めたのが遅くて神経のレジデントの空きはなかった。その時、小児神経科の先生方が、現在の勤務先である国立精神・神経センター武蔵病院（当時は国立武蔵療養所で、古色蒼然としていた）を勧められた。やはり空きがなく、もし空いたらお願いしますといって待った。連絡はなく、あきらめかけた時に思いがけず連絡があり、レジデントとなった。レジデント終了時にたまたま留学休職する医師がいて、常勤医に採用していただき、また先任の指導医が退職して、多数の難治てんかんの患者を引き受けた。止まらないてんかんばかりで四苦八苦したが、時には止まり、また教科書にはないことや常識には誤りがかなりあることがわかり、楽しくなった。

たまたま国立療養所西甲府病院の医長が定年退官され、その後任にと言われた。若いうちにいろいろ経験する方がよいという恩師のご配慮であったが、武蔵病院に戻れるという約束はなく、片道切符であった。知らない土地で3病棟120名の重症心身障害児・者を2名の医師で、後半は1人で全員をみることになり、厳しかったが、痙攣の治療や残存機能評価、多職種の連携など、障害児医療を実感した。

たまたま、武蔵病院の医長に空きができ、戻ることができた。西甲府病院から出張で武蔵病院に行った時に、偶然、武蔵病院に講演に来られた米国の著名な小児てんかんの専門家に会い、それが縁でボストン小児病院でてんかんを学ぶことができた。現在では、重症心身障害児・者病棟を担当し、小児神経の臨床と小児てんかんの治療を専門としている。

それぞれの場面で精一杯やったが、たくさんの偶然がなかったら今の自分はないと感謝している。

編集部からのお願い

機関紙「村高」の発行は毎年一月に編集会議を行い、三月上旬原稿締切、五月上旬に皆様にお届けする手順で編集作業をすすめております。

皆様よりの投稿を歓迎しておりますが、編集部より執筆依頼がありました際にはご協力のほど宜しくお願いいたします。なお、掲載文は本校ホームページに配信することも検討しておりますのでご了承下さるようお願いいたします。

ひと

終戦60年特集
NHKドキュメンタリードラマ
『望郷』
もう一人の主人公
富樫利男さん（旧制40回卒）

戦後六〇年、戦争は風化しつつあるといわれる。戦争のない時代がそれだけこの国に続いた証でもあるが、同時にまたぞろ繰り返される危機感と結びついて語られる警鐘の言葉でもある。

戦争を知らない人達が大半を占める今日、過去の歴史を学び、これを後世に伝えることは今の時代を生きる人達の未来への責任といえるだろう。

昨年放映されたNHKドラマ「望郷」は多くの人に深い感動を与えた。

今から六〇年以上も前、シベリアのラーゲリと呼ばれた捕虜収容所、日本人とルーマニア人との間に交わされた約束と友情は時空を超えて蘇り、奇跡的な展開を見せてゆく。運命の不可思議さと事実の持つ重さに加え、ドラマの主人公が関川村出身の人であることは感動を一層深めさせたことだろう。

更に、このドラマに我が母校の先輩が大きく関わっていたことを知れば、もう一段の感動を呼ぶに違いない。

今回登場していただいた富樫利男さんは、同胞の戦後処理に人生をかけて取り組んだ、いわば「望郷」のもう一人の主人公といっても過言ではない。

寒さの続く二月中旬、東京・池袋に富樫さんを訪ねた。

柔らかな物腰と紳士的な風貌からはシベリアで苛酷なラーゲリ体験をされたことは想像も出来ない。しかしその語る言葉の端々から、決して風化させてはならない歴史の断面を垣間見ることが出来た。

まずは軌跡を追ってみる。

塩野町村（現朝日村）早稲田出身の富樫さんは、昭和一三年旧制村上中学に入学。翌一九三九年、ナチス独はポーランドに侵入、第二次大戦が勃発。翌年には日独伊三国同盟が成立、突入していた日中戦争と併せ、戦火は大きく広がろうとしていた。

軍国主義の時代とはいえ、村上中学時代を振り返り、英語教育をみっちり受けたことがその後の人生に大きく役立ったと富樫さんは語っている。

昭和一七年、難関を突破して陸軍予科士官学校に入学、陸士五八期生として教育を受ける。

昭和二〇年三月、陸士卒業と同時に北朝鮮連浦飛行隊に赴任。当時北朝鮮は日本領土とされていた。

戦局は敗色濃厚、少尉任官となり、沖縄上陸作戦に備えて特攻隊員となるべく飛行訓練を受けていた最中、八月一五日を迎えることになる。

その直前、ソ連軍は不可侵条約を一方的に破棄して国境を超え旧満州、千島、樺太に進攻した。

特攻隊員としての散華はまぬがれたものの、運命はここで大きく転換することになる。十月、ソ連当局の命令で北朝鮮興南港を出発した船は、四日後ウラジオストック近くの港に着いた。

スターリンはポツダム宣言に反して、日本軍人五〇万の強制抑留の指令を発していた。暫くして、再び日本帰還と称してこの港から貨車に乗せられる。

不安をよそに、列車はシベリア鉄道を西へ西へとひた走る。バイカル湖を超え、やがてウラル山脈をも超えた。

貨車に詰め込まれて23昼夜、着いたところはヨーロッパロシアの雪に埋もれた駅。さらにここから八〇キロの雪中行軍が始まる。四日三晩かかってたどり着いたのがエラブガ（現タタール共和国）という町のラーゲリ。暦は昭和二一年の元旦になっていた。まさかここで二年の年月を過ごすことになろうとは予想もできないことだった。

ラーゲリには先客がいた。一九四三年、スターリングラードの攻防戦でナチス独は壊滅的な敗北を喫する。独軍の捕虜はこのエラブガに収容されていた。

北緯五五度に位置するエラブガは一年の半分は冬、最低気温マイナス四三度、ツアーの帝政時代からの流刑地でもあった。

日本人将校約九千人はここに抑留。生活条件は極めて悪く、食糧不足は深刻で、厳しい労働にとても耐えられるものではなかった。

一日の食糧は黒パン三百g、大麦や豆などの穀物類四百g、それに野菜と僅かな魚、肉、砂糖が出た。黒パンを放り込んで、漸く腹の虫が動き出すという有様、とても体の要求を満たすものではなかった。二〇歳そこそこの富樫さんの体重は四二キロまで落ち込んだ。

ラーゲリでの使役は約十五人位の班で木材の伐採と運搬などにあたった。

二人曳きのノコギリで一日五～六本がノルマ。水分を含んだ木は重く、荷車又はそりに乗せ人力で引いて集積所まで運ぶ。農園ではじゃがいも作りもやった。

国際法で将校の強制労働は禁止されていたが、ソ連は生活のための労働は強制ではないと主張した。しかし、抑留そのものが違法行為であることは明白な事実だった。

抑留中、八五名が異国の土となったが、その多くは一年目であった。

遺体は凍土に穴を掘って埋めた。

収容所での僅かな楽しみといえば、三か月に一度の入浴や、白樺で作った将棋や囲碁マージャン、時には演芸大会などもやった。

いつしか一年が過ぎ、抑留が長引くにつれ、夢にみるのは祖国日本のこと、日本帰還の話がどこからともなく流れ、「ダモイ」という言葉が飛び交うようになった。昭和二二年も秋になろうとしていた。

ダモイは突然やってきた。直前まで知らせないのがこの国の流儀。不当抑留という国際非難を避けるための処置だった。

エラブガを離れる時「二度とこの土地は踏むまい」二年間の苛酷な生活を思い富樫さんはそう決意したという。

シベリア鉄道でナホトカに着く。引揚船は三日かかって舞鶴に着いた。

浴槽に飛び込んだ時は子供のように湯をかけあい、帰国の喜びに浸ったという。

国破れて山河あり、故郷塩野町村で富樫さんはしばし心身の疲れを癒すことになる。

日本の復興のために何を為すべきか、熟慮の末富樫さんは昭和二五年東京大学工学部に入学する。二八年卒業、中部電力に入社。産業復興には土台となる電力の開発が欠かせない時代であった。

その後日本はめざましい復興をとげ、時代はやがて高度成長期へ突入してゆくことになる。

日本で初めての原子力発電―東海一号の建設にも携わり、昭和三九年には科学技術庁長官賞を受けた。

社会が落ち着くにつれ、富樫さん達の心に残ってやまないのはエラブガの凍土に眠る同胞達のことだった。遺骨を遺族のもとに帰すことなしに戦後は終らない。帰還者達の運動が始まる。

一九九〇年、鉄のカーテンといわれたソ連は劇的な崩壊を遂げる。富樫さん達の運動にも燭光が見えてくることになる。

一九九八年七月、富樫さんを団長とする墓参団は政府墓参団とともに四度目のエラブガを訪れる。この年、厚生省による念願の遺骨の収集も行われ、二〇〇〇年十一月には現地に念願の慰霊碑が建立、漸く富樫さん達の戦後は終りを告げることになる。

長い長い道のりだった。

遺骨収集は国の責任、厚生省を動かし、またエラブガ市当局と、時には丁丁発止の交渉の末であったことは、墓参団の記録集に克明に記されている。

語学力と巧みな交渉術を駆使した富樫さんの存在は大きかった。

それにしてもスターリンが日本人将兵を何故抑留したのかは歴史の謎とされてきた。

ドイツの戦後処理を決めた米英ソのヤルタ会談（一九四五）には秘密協定があった。それは、独降伏後のソ連の対日参戦とカラフト、千島等の占領支配が含まれていたが、ソ連はこの協定以外に北海道の北半分占領の野望を秘かに描いた。ソ連のこの野望は日本軍に南下を阻まれ、また米国の拒否により頓挫。激怒したスターリンはその腹いせに抑留指令を発したというのが定説になっている。

スターリンの罪状の数々は、一九五六年フルシチョフの秘密報告で明るみに出ることになる。グルジアの狂人と呼ばれたこの男の負の遺産は、未だなお歴史に暗い蔭を投げ掛けている。

二〇〇六年、年明けから日本列島は冷凍庫にでも入ったかのような寒さが襲った。池袋のデパ地下には日本はおろか世界中の食糧がところ狭しと並ぶ。

六〇年前、零下四〇度の極寒の地で満足な食糧すら得られぬ日々に耐えていた人がいたことは思うべくもない。

後輩の理解を助ける為に、沢山の資料を用意、どんな質問にも快く応じてくれた富樫さん。

囲碁五段、詩吟にも親しむ等多才な趣味を持ち、また英語、露語を駆使、未だ現役の社長として年令を思わせない若々しさに満ちていた。

エラブガでの二年間は人生でどういう意味を持っていたのですか？との問に、「辛い体験を若い時にしたことはどんなことにも耐えられる抵抗力がついた」富樫さんは語る。その言葉は重く響いた。

人は自分の生きる時代を選ぶことは出来ないが、時代の持つマイナスをプラスに変えて生きることは可能だ。

今日の繁栄は戦後の復興と生活の向上を目差してこれら先輩達が営々として頑張ってきた結果であることを人はともすれば忘れがちになる。

国際政治の谷間に翻弄されながらも恩讐を超えて日本とロシアの友好と親善に貢献、逞しく生き抜いてきた富樫さん。

あの辛い思いは再び繰り返してはならないと語る言葉には千鈞の重みがあった。

「望郷」のドラマなくしては知ることのなかったエラブガ。

富樫さん達の建てた慰霊の塔は、今日もその地に諸々の思いを込めて立続けている。

NHKの戦後六〇年を記念して製作されたドラマ「望郷」は、岡崎栄演出、関口知宏主演で昨年五月に放映、その後三回にわたり再放映されました。富樫さんはエラブガ会の責任者として沢山の資料を提供、ドラマの完成に協力したということです。（大滝　修　新制十三回卒記）

岩船大祭

ふるさと岩船の祭りは、歴史と伝統を背負って立つ「いわふねの子ども」が光る大祭である。

岩船の例大祭は十月十八日十九日である。

五歳までシャギリに乗ったがその後三年は親戚に不幸が続いて乗れず、更に大東亜戦争勃発して町内のシャギリは曳けなく鉦も太鼓も叩かないで私の祭りは終わった。

岩船の祭りは氏子の祭りであり漁師の祭りでもある。九台のシャギリを曳き回すが神事には忠実で神妙な気質だから、

りにならない。

各町内のシャギリは修復が何度か行われている。三年前、大黒天屋台は安政五年から一四五年振りに大修復を行った。費用二五〇〇万円を町内七十軒が均一負担。昔は主だった家が応分の寄付をしたが、今の世は平等に分担させてと言ってくる。それは孫子の代まで伝え残すものだという共通の認識が徹底しているからだ。時代は変わったと感じる。

岩船祭りは酒と料理の祭りでもある。小学校の校長は各家庭を回るから、三升四合も飲んだ逸話がある。

大祭後の日曜「空きビン回収」が行われ、一升ビン三〇〇〇本、ビールビン約一〇〇〇〇本が校庭に山積みされる。祭祭りは粛々と行われる。近年働く主婦が多くなって土日にしてほしいという意見があるが、浜の衆は絶対ノーだから神主様も賛成しない。

「お参りせぬ者祭りを楽しむべからず」の共通認識があるから祭りは宵宮から始まる。十八日夜神社を行き来する正装姿の老若男女の足並みは、途絶えなく続く。

祭りのクライマックスは「ともやま」である。午後十二時（昔は翌朝五時頃）、最後の浜回りを終えたお神輿が神社へ帰還。お舟の先導と白駒のご神馬を従えて、県無形民族文化財に指定されている「艫山」（ともやま）とよぶ、ご神体を本殿に納める行事を行って長い一日が終わる。極めて感動的な行事でこれを見ないと祭りに関係するのは八〇〇世帯足らずだろうからすごい数だ。

人はどこに巣立とうとも誰にでも故郷はあるわけで、その絆は行事に参加してこそ一層深まると思う。「地域の子は地域で育てよう」の意識が強い岩船であるが、その中心にあるのが岩船祭りであり、お祭りを通して、注意したり叱ったり心配したりの大人の一声がとんで、子どもは学ぶ。

「地域という最も小さい単位である町内で子どもを育てる」この忘れつつある不易は、岩船だから出来る大事な教育の場でないか。このことが将来の伝統行事の継承や地域の活性化に生きて働いて来るのだと思う。町内に対する思い、団結や協力という精神は大切に受け継がれている筈である。

各町内が、積立の自費で建設した夫々の公民館を持って活動するのも、むべなるかなである。

今年は神社曳き出しで、恵比須と大黒天（私の町内の）が仲良く並び揃い踏みを披露する年だ。

晴天であってほしい。

川上　孝（新制2回卒）

瀬波大祭

瀬波大祭は、西奈弥（せなみ）神社の祭礼である。

毎年9月3、4日に行なわれ、神輿1基、シャギリ屋台5台が家内安全と繁栄の願いをこめて、夜遅くまで各町内（浜町、中町、新田町、上町、学校町）を練り歩く。そして、年々賑わいを見せている。

西奈弥（せなみ）神社は、磐船郡八社の中の神社で千二百数十年の歴史を持つ由緒ある神社である。

祭神は、保食神（うけもちのみこと）で、食べ物をつかさどる神である。

また、「せなみ」と言う地名は、神が家来を従えて、海上からこの地に来られたとき、快風を背に受けて上陸されたので「よき背の波かな」と申された事から生まれたと言われている。

現在、瀬波町には伊与部、磯部、小島、小武、吉田の姓が多い。これらの姓は、神とともに来られた家来の姓であり、家来を先祖に持っている姓とも言われている。

しかし、明治18年の大火で、神霊や資料等を焼失しているので詳しい事は不明だ。

村上は、夏の村上大祭（7月6、7日）に始まり、お盆が終わって瀬波大祭、瀬波大祭が終わって岩船大祭（10月18、19日）、そして岩船大祭が終わればお正月と季節の移ろいに祭りがある。

〈村高関東支部役員一覧〉

役職	氏名	卒業回
名誉会長	小川　景士	旧制40回
顧問	長郷　邦男	旧制44回
〃	渡辺　孝教	新制5回
会長	本間　勝治	新制9回
副会長	鈴木　亮	新制9回
〃	小野安雄（広報）	新制10回
〃	佐藤　勝	新制14回
事務局長	長谷川康夫	新制10回
幹事	齊藤　喜英	旧制35回
〃	大平　金一	旧制36回
〃	鈴木　喜一	旧制39回
〃	富樫　利男	旧制40回
〃	岩間　昌昭	旧制42回
〃	近　五郎	旧制46回
〃	船山　泰三	旧制46回
〃	木村　一昭	新制1回
〃	川上　孝	新制2回
〃	小田　正二	新制3回
〃	川村　正	新制4回
〃	村川　赳	新制4回
〃	湯浅　慶子	新制5回
〃	中野　素子	新制6回
〃	野中千枝子	新制6回
〃	荒木　廣	新制6回
〃	本間　岩雄	新制7回
〃	斎藤　實	新制7回
〃	林　節子	新制7回
〃	市岡　貞雄	新制8回
〃	木藤　克子	新制8回
〃	中野　菊栄	新制8回
〃	小池　悟朗	新制8回
〃	関根　洋子	新制9回
〃	小林　ミチ	新制10回
〃	稲葉　喜重	新制11回
〃	平山　進	新制12回
〃	大滝　修	新制13回
〃	菅井　眞人	新制13回
〃	小野　繁	新制13回
〃	稲葉眞樹子	新制14回
〃	尾崎　茂	新制15回
〃	川村　稔	新制16回
〃	山本　宏平	新制17回
〃	秋山　芳行	新制19回
〃	佐藤　陽三	新制20回
〃	高橋　国栄	新制20回
〃	鳥屋　栄二	新制23回
〃	永井　賢吉	新制26回
〃	中村　英之	新制29回
〃	相馬　章	新制30回
〃	丹田　安夫	新制30回
〃	佐藤　康則	新制30回
〃	本間恵美子	新制31回
〃	篠崎　泉	新制34回
〃	前田　格	新制36回

●維持会費納入のご協力をお願いします

同窓会の活動運営を支える唯一の財源として、皆様に年間1口（2千円）以上の維持会費をお願いしています。なにとぞ添付振込用紙にてご協力をお願いいたします。昨年度は多くの方々からご協力を賜わり、ありがとうございました。本年度もよろしくお願い申し上げます。

平成17年度維持会費拠出者（順不同 敬称略）　18年3月20日現在

旧制

31回　貝沼　一郎
　　佐藤　志朗
32回　中野　菊夫
36回　大平　金一
39回　鈴木　喜一
40回　渡辺　功
　　前田　清三
　　小田　周平
　　小川　景士
　　富樫　利男
41回　長谷川和夫
42回　岩間　昌昭
　　稲垣嘉一郎
　　斎藤　一郎
44回　長郷　邦男
　　長郷　健三
46回　近　五郎
　　船山　泰三
　　奥村　有功
　　本間　繁輝
47回　倉崎　英逸
　　内田　靖
　　八木下真司

新制

1回　木村　一昭
2回　小野　正夫
　　本間　正英
　　川上　孝
　　寺井　明夫
　　渡辺　善弘
　　島村　悌志
3回　小田　正二
　　斎藤惣次郎
　　富樫　栄一
　　渡辺　陽喜
　　佐野　清広
　　庄司　弘
　　遠山徳四郎
　　田中　照浩
　　森田　亨平
4回　川村　正
　　村川　赳
　　大竹　茂久
5回　佐藤　誠
　　青木　新一
　　加賀　政夫
　　村上　瓔子
　　藤田　桂
　　上山　龍介
　　宗村　承子
　　小田　勝四
　　稲葉　五郎
　　櫻井久美子
　　湯浅　慶子
　　渡辺　明犬
　　益田　智
　　和泉　義隆
　　遠山　雄平
　　熊崎　英二
　　渡辺　晋
　　横井　正義
　　中山　定世
　　村川　洋子
　　佐藤　光廣
　　佐藤　祐郎
　　本間　昭彦
　　横山　芳男
　　菅　一郎
　　渡辺　孝教
　　飯沼　孝
　　早川　佐智
　　青木恵美子
　　石田　薫
6回　野中千枝子
　　小野　裕子
　　外門　功
　　松田　順子
　　大平　悦子
　　岩倉　宏之
　　泉原　富子
　　長谷川　勝
　　久保田美代
　　花形キヨミ
　　大平　恵吾
　　荒木　廣
　　岩澤　正子
　　佐藤　修三
6回　内山　忠
　　乾　良雄
　　大湊　満
7回　小林　順次
　　斎藤　誠
　　鈴森　政秋
　　中村　泰而
　　本間　岩雄
　　永田　康
　　林　節子
　　水野　貞
　　木村　保男
　　斎藤　実
　　佐藤　守
　　佐藤　次郎
　　石本　保子
　　内山　安蔵
8回　宮坂　久子
　　押切　助衛
　　八藤後剛輔
　　岡田英美子
　　市岡　貞雄
　　根岸みのり
　　山口　捷平
　　佐藤　タエ
　　大滝　正次
　　青木　テル
　　伊与部国男
　　鷲山　ミキ
　　木村　浩
　　赤見　市郎
　　木藤　克子
　　本間　次郎
　　板垣　三知
　　中野　菊栄
　　風間　隆治
　　川崎　昇
　　宮本　哲夫
　　高橋　正介
　　佐藤　彊介
　　加藤　邦彦
　　吉岡　襄介
　　小形　庸
9回　三浦　誠治
9回　宮部　博明
　　中山　敏彦
　　本間　正英
　　関根　洋子
　　佐藤　雪子
　　八藤後栄祐
　　菅井　健二
　　稲垣　伸夫
　　齋藤　吾郎
　　河内　勝彦
　　板垣　義郎
　　鈴木　亮
　　平井　俊雄
　　江藤由紀子
　　本間　勝治
　　風間　茂雄
　　宮本セツ子
　　小川　稲子
　　川村　伸治
　　佐竹　英章
10回　本城　賢司
　　小野　安雄
　　小田　勝郎
　　中村　四郎
　　丹田公之助
　　鶴橋　康夫
　　長谷川康夫
　　志田　荘
11回　小田　征夫
　　町田　信
　　古川　宏
　　佐藤　清
　　齋藤　吾朗
　　本多　康夫
　　渡辺　喜市
　　大矢　英男
　　千葉　伊勢
　　小林　正子
　　山脇　昂
　　菅原　和士
　　齋藤　紘
　　渡辺　慶子
　　山賀　隆次
　　平山　進
12回　佐藤　訓子
　　当摩　幸彦
　　野口　春樹
　　押切　共子
　　星名　敏子
　　石川　時子
　　月居　洋子
13回　大滝　修
　　磯部　洋人
　　高橋　翼
　　渡辺　輝男
　　磯部　正男
　　菅原　明
　　小野　繁
　　小野田祐三
　　渡部　和子
　　中村貴美子
　　菅井　眞人
　　伊藤　衛
　　佐藤　建夫
　　加藤万里子
　　富山　久
14回　松永　純子
　　佐藤　勝
　　細野　勲
　　黒岩　紘子
　　菅原　勲
　　野口　英征
　　村山　孝夫
　　貝沼ムネ子
　　土肥　直子
15回　佐藤　晴夫
　　尾崎　茂
　　松澤　正
　　伊藤満紀子
　　佐野　清克
　　中倉　俊文
　　志賀　肇
　　寺井　賢二
　　荒井　チヨ
　　青山　光夫
　　田中　敏博
　　小田　毘古
　　小田　洋雄
16回　中尾　伊子
　　遠藤　久子
　　松田　七郎
　　二宮　照子
　　木藤　勝喜
　　川村　忠久
　　川村　稔
　　石川　淑子
　　中山　国男
　　菊地　司郎
　　和田　洋美
　　佐藤　三男
　　小池　登
　　菅原　長英
　　大坪　信武
17回　市川　房子
　　増田ユリ子
　　倉崎テル子
　　伊与部　健
　　佐藤　建夫
　　加藤万里子
　　富山　久
　　松永　純子
　　佐藤　勝
　　細野　勲
　　黒岩　紘子
　　菅原　勲
　　野口　英征
　　村山　孝夫
　　貝沼ムネ子
　　土肥　直子
18回　佐藤　晴夫
　　尾崎　茂
　　松澤　正
　　伊藤満紀子
　　佐野　清克
　　中倉　俊文
　　志賀　肇
　　寺井　賢二
　　荒井　チヨ
　　青山　光夫
　　田中　敏博
　　小田　毘古
　　小田　洋雄
18回　板垣　三男
　　佐藤　せつ
　　佐藤　敦子
　　中村　修平
　　林　喜代子
　　佐藤　修身
　　海沼　昌子
　　中村　和憲
　　濵中　壽子
　　高橋　繁夫
　　五十嵐信夫
　　小幡　秀生
　　相馬　喜春
19回　長坂三重子
　　村山みち子
　　河口富美子
　　渡辺　哲朗
　　安富　成良
　　高橋　力
　　五十嵐和寿
　　井上ミヤコ
　　秋山　芳行
　　野口　英夫
20回　中村　謹一
　　渡辺　恭子
　　稲葉　光明
　　穂坂富久子
　　木村　幸夫
　　佐久間啓子
　　下妻　諭
　　繁多　紀子
　　中村加和子
　　本間　廣
　　斎藤　満男
　　尾上　啓子
　　志田　裕
　　長　宗雄
　　小川　博道
21回　飛田　芳子
　　斎藤　勇一
　　吉田恵美子
　　瀬下　江二
　　萩原美津枝
　　難波　光子
　　川上　幸男
21回　川内　正
　　高橋　美徳
　　中村　修平
22回　鈴木　鉄雄
　　中村　徳蔵
　　美濃　忠三
　　八藤後　稔
　　安藤とし子
　　田村　立子
　　斎藤　大治
　　村山　直弘
　　五十嵐敏文
23回　櫻井　博夫
　　渡辺　次男
　　櫻井　繁雄
　　鳥屋　栄二
25回　森井眞由美
26回　松澤　豊
28回　岡　正子
　　鈴木　和人
29回　大塚　寿子
　　山本　和代
　　中村　英之
30回　相馬　章
　　伊藤　一則
　　小田　徹
　　中村　好
　　清野　篤
　　斎藤　司
31回　本間恵美子
33回　広田　昭美
　　石井　八州
　　鈴木　健一
36回　平田　丞
　　佐藤利枝子
37回　大滝　克美
38回　峰田　知己

定

11回　細井ミツ子